

## 「でんきが築く豊かな未来」

秋田県立横手清陵学院高等学校 2年 齊藤 駿汰

私たちは、普段から特に意識する事なく電気を使って生活しています。そんな我々が電気を使えなくなってしまうたらどうなるのか、そんな疑問に私が小学校六年生の頃起きた「東日本大震災」が答えてくれました。震災が起きた当時、私は目前に控えた卒業式の練習を体育館でしており、天井のライトが突然グラグラと揺れ始めたのを今でも覚えています。家に帰ると停電が起きており私たち家族は普段使うことのなくなった電池式のラジオを引っ張り出して情報を集め、事の悲惨さを知りました。そんな中スーパーやコンビニへ買い出しに行くと電灯がついていないためか、見慣れた場所のはずなのに別の場所へ来てしまったかのような錯覚に陥りました。電気が来ない、それだけでこれほど世界は変わってしまうのかと幼かった私でも思ってしまうほど見慣れた景色は一変していました。

その後電気が復旧し、いつもと変わらぬ日常を送っていく中で、私は一つ夢を持ちました。電気が来なくなってしまう状況を少しでも短くして人々に不安な日々を送らせないようにする。そんな仕事に就きたいと強く思いました。

中学生の時、自分の身近で皆に電気を送り届けているのはどんな仕事なのだろうかと調べ、電気自体を作る仕事とその電気を家庭へ送り届ける仕事と大きく二つに分けられることを知りました。私は自分の力で電気を一つ一つの家庭に送りたいと考えました。

そして今、夢の実現のために、高校の工業科で電気の専門知識を身につけています。夢の実現はとても難しいことですが日々の努力を怠らず、すこしでも近づけるように学校生活を送っていきたいと思います。